東京大学日本史学研究室紀要　第十四号　二〇一〇年三月

陸軍による海戦情報入手とその後の意志決定

―ミッドウェー・レイテ沖両海戦―

井上陽介

Ⅰ．はじめに

本稿は、太平洋戦争において、日本海軍が空母四隻撃沈などの大打撃を受け、共同作戦を実施していた陸軍の作戦に多大な影響を与えたミッドウェー・レイテ沖両海戦を考察の対象としている。

両海戦における海軍から陸軍への情報伝達については、すでに先行研究が少なからず存在する。野村実「太平洋戦争下の『軍部独裁』」[1]は、「陸軍には海軍の情報が入らず、海軍には陸軍の情報が入らないのが実情であった」と指摘している。ミッドウェー海戦については戸部良一『逆説の軍隊』[2]が、「陸軍当局者には敗戦の事実は伝えられても、敗戦の規模と実態は知らされなかったという。味方の敗戦の実態を知らなければ、効果的な戦争指導は無理であった」とし、海戦の具体的な内容が伝えられていなかったとしている。他方、レイテ沖海戦については、有末精三『政治と軍事と人事』[3]は「殊に陸海軍間の相互不連絡が比島決戦作戦方針の大変更、レイテ沖海戦、レイテ島決戦失敗の主要な原因となった」し、高山信武『参謀本部作戦課』[4]も「海軍が（中略）敵空母は全滅せりと通報して陸軍の作戦を誤まらせ、比島決戦を惨敗に終らせた」と述べている。有末と高山は共に旧陸軍軍人である。つまり、海軍が陸軍に情報を伝えなかったからこそ陸軍の作戦が失敗した、という見方がいわば通説になっていたのである。

しかし私は、当時作戦指導を行う立場にあった陸軍上層部の回想にこうした見方が出てこないことに着目し、疑問を持った。そこで、陸軍で作戦指導などの実務をこなしていた参謀本部作戦部長の日記を中心に、史料を読み進めた。

以下、海軍から陸軍への情報伝達の実態と、陸軍による情報統制のあり方の二点を検討したい。

第一は、太平洋戦争期はもとより開戦以前においてさえ海軍から見た「陸軍の動員、物資の不法奪取」[5]が行われていたことなどから、太平洋戦争期の陸海軍間の対立を過度に強調する傾向が従来見られたが、

それは共同作戦を実施する際においても、情報の共有すら出来かねる状況であったのかという点である。

第二は、陸軍中枢は知り得た情報をどの程度隷下の軍人に伝えていたのかという点である。仮に海軍から陸軍中枢に情報提供がなされていたとしても、陸軍中枢が情報統制を行ってしまえば、隷下の軍人が情報を得ることは出来ず、海軍が陸軍に情報を伝えなかったと誤解する可能性が高い。陸軍内部の情報統制はいかなるものだったのか。

尚、本稿最後に年表、組織図と各海戦時の主要官職在任者を示した表を掲載したので適宜参照されたい。史料引用にあたっては、片仮名を平仮名に改め適宜句読点を補い、引用者注は〔〕であらわした。

Ⅱ．軍令部の情報入手

海戦の情報は軍令部から参謀本部に伝達されるので、軍令部がどのように情報を得ていたのかを見た上で、軍令部が参謀本部に齎した情報を見てみたい。現地から軍令部に上達されなければ参謀本部への伝達がなされる筈が無いからである。まずは軍令部が入手した情報の正確性とその即時性とを見てみたい。

（1）ミッドウェー海戦

ミッドウェー海戦では六月五、六日に赤城、蒼龍、飛龍、加賀の四空母が沈没、最上は大破、同様に大破した三隅は日本側からは最後は誰も見とどけていない状態で七日に沈没した。こうした情報を軍令部はどの程度入手していたのであろうか。当時、軍令部員（第一部第一課）と大本営海軍部参謀を務めていた高松宮宣仁親王の日記[6]と軍令部員（第一部第二課）金岡知二郎中佐の日記[7]に記された被害を纏めると表1（次頁）のようになる。『高松宮日記』によれば、第一航空艦隊などからの無線通信により、ほぼ即時に情報がもたらされていることが窺える。すなわち、ミッドウェー海戦では軍令部は被害を受けた艦艇に関する情報を適宜得ていたといえる。

（2）レイテ沖海戦

次に、レイテ沖海戦についてみてみたい。レイテ沖海戦の被害を纏めると表2（一八六頁）の様になる。但し煩雑となるので戦艦、航空母艦、巡洋艦の被害に限定した。

①中澤佑軍令部第一部長ノート

軍令部が得た情報の全容について直接知ることは史料の制約上難しいが、まずは当時、軍令部第一部長を務めていた中澤佑が記した「中沢軍令部第一部長ノート　戦況第六」[8]を確認したい。これを纏めたのが表2である。不充分なものではあるが、空母四隻の沈没を除けば、沈没した艦艇に関しては、全て被害報告が来ていることがわかる。尚、表2には記さなかったが、千歳と多摩が落伍した等、空母に関しても被害情報は入っている。しかし、このノートには空母四隻沈没は記されていない。そこで四空母沈没の報を上奏書により確認したい。

②上奏書

当時の内大臣木戸幸一の戦後の回想によれば「統帥部としては戦況は仮令最悪なものでも包まず又遅滞なく天皇には御報告申上て居った」[9]とされる。大本営海軍部による上奏の内容は以下の通りである

表1　ミッドウェー海戦（1942年6月）

	艦名	艦種	被害	史料A	史料B	史料C	史料D	史料E	史料F
5日	蒼龍	航空母艦	沈没	5	6	6	@	7	7
	加賀	航空母艦	沈没	5	6	6	@	7	7
6日	赤城	航空母艦	雷撃処分	7	6	6	@	7	7
	飛龍	航空母艦	雷撃処分	7	6	6	@	7	7
	最上	巡洋艦	大破	7			12	7	7
	三隅	巡洋艦	大破	7					
7日	三隅	巡洋艦	消息不明	9			12		12

＊数字はその艦に関する情報を入手したとされる日付を表す
＊「@」は五日項に記載があるが、六日或いは七日に記載されたと見られる
＊『高松宮日記』記載の五日と推定される電報には「「飛龍」は総員退去」、
　六日と推定される電報には「聯合艦隊「赤城」を処分すべく下令す」とあり
　六日の時点で両者の沈没を充分に予測出来たと見られる
＊以下の史料より作成

史料A：『高松宮日記』に記載されている電報の日付
史料B：「金岡知二郎海軍少将日記抄」
史料C：「井本日誌」
史料D：「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の四」
史料E：「田中新一中将回想録　その二」
史料F：「大東亜戦争作戦記録　其六」

（表2）[10]。上奏書から四空母沈没に関しては二八日に上奏されていることがわかる。

上奏日時[11]

二三日一〇三〇　青葉航行不能
二四日〇九〇〇　高雄、昨日被雷　君川丸〔海軍貨物船〕沈没
二五日〇九〇〇　武蔵・第二戦隊〔山城、扶桑、最上〕・若葉沈没
　最上大破炎上
　大和・長門・矢矧、清霜被害　妙高被雷
二六日〇八一五　鈴谷・秋月沈没　最上総員退去
　第一遊撃部隊別働隊〔第二戦隊、山雲、満潮、朝雲〕（時雨以外）沈没
　鳥海・筑摩・熊野相当の被害　筑摩、鳥海落伍（野分、藤波が護衛）
　千歳・多摩落伍　瑞鶴通信不能　長官は大淀に移乗　阿武隈損傷
二七日〇九〇〇　能代・阿武隈・鬼怒・浦波沈没　熊野一時航行不能　沖波損害軽微
二八日〇八三〇　瑞鶴・瑞鳳・千歳・千代田・秋月沈没、多摩被雷

但し、山田朗氏の『昭和天皇の軍事思想と戦略』[12]にも同様の表が掲載されているが、実際には記されていない一〇月二三日「愛宕沈没、摩耶轟沈」が記されているなど内容に誤りが見られる。そのため山田朗氏の主張する「実際に沈没したにもかかわらず、天皇への報告で言及されなかったのは駆逐艦二隻だけである」[13]ということは決して無く、

表２　レイテ（比島）沖海戦（1944年10月）

	艦名	艦種	被害	史料①	史料②	史料③	史料④
23日	青葉	巡洋艦	航行不能	23	23	23	23
	愛宕	巡洋艦	沈没	23	23	23	
	高雄	巡洋艦	航行不能	23	23	23	24
	摩耶	巡洋艦	沈没	23	23	23	
24日	武蔵	戦艦	沈没	24	24	24	25
	大和	戦艦	損傷	24	24	24	25
	長門	戦艦	損傷		24	24	25
	妙高	巡洋艦	損傷	24	24	24	25
	矢矧	巡洋艦	損傷	24	24	24	25
	利根	巡洋艦	損傷			24	
25日	千歳	航空母艦	沈没	25		27	28
	千代田	航空母艦	沈没	25		27	28
	瑞鶴	航空母艦	沈没	25		27	28
	瑞鳳	航空母艦	沈没	25		27	28
	扶桑	戦艦	沈没	25	25	26	25
	山城	戦艦	沈没	25	25	26	25
	鈴谷	巡洋艦	沈没	25	26	26	26
	最上	巡洋艦	雷撃処分	25	25	26	25
	鳥海	巡洋艦	雷撃処分	26	25	25	26
	筑摩	巡洋艦	消息不明	26	25	26	26
	多摩	巡洋艦	消息不明		25	26	26
	金剛	戦艦	損傷				
	榛名	戦艦	損傷				
	伊勢	戦艦	損傷				
	熊野	巡洋艦	損傷	25	25	25	26
	羽黒	巡洋艦	損傷				
	大淀	巡洋艦	損傷				
	那智	巡洋艦	損傷		25	25	
26日	能代	巡洋艦	沈没	26	26	30	27
	阿武隈	巡洋艦	沈没		26	26	27
	鬼怒	巡洋艦	沈没	27	26	27	27

＊数字はその艦に関する情報を入手したとされる日付を表す
＊複数日に渡り損傷を受けたものは最初に損傷を受けた日のみ記載した
　但し、後に沈没した艦は沈没の日のみ示した
＊以下の史料より作成

史料①：「豊田副武海軍大将日誌」
史料②：「中沢軍令部第一部長ノート　戦況第六」
史料③：「眞田穣一郎少将日記」
史料④：「奏上書」

それ故「天皇への上奏は艦艇の損害の速報という点でほぼ正確だった」という氏の指摘には疑問が残る。

ここで注目されることは、戦艦、巡洋艦、駆逐艦に関する沈没、航行不能、落伍、及び航空母艦の被害については、小澤部隊所属の艦船も含めてその多くが、当日、或いは翌日には軍令部が情報を入手し上奏されているのに対し、二五日の空母四隻沈没に関してだけは上奏されたのが二八日と三日間もの差異がみられることである。この理由に関し『戦史叢書』は、軍令部がレイテ沖海戦に出撃した空母四隻の沈没を知ったのは、二七日正午に小澤中将が奄美大島に帰投[14]した後のことであったからだとしている[15]。

それ故、二七日九時の「戦況に関し御説明」では空母四隻沈没に関して触れ得ず、翌二八日八時三〇分に初めて奏上されたのである。それでは何故、軍令部への情報伝達は二七日正午以降と遅れたのであろうか。

③四空母沈没情報伝達遅延

小澤部隊の一隻、日向の艦長であった野村留吉が著した「比島沖海戦中の日誌[16]」一〇月二五日項には「今朝瑞鶴にありし長官旗は今大淀にあるも堂々たる空母4隻は今やなし」と記されており、小澤部隊の一隻である日向は四空母が沈没した二五日当日に情報を得ていることが確認できる。第一機動部隊長官兼第三機動部隊司令長官であった小澤治三郎中将は大淀に移乗した当の本人であることから、小澤が空母四隻沈没を当日に知り得たことは確実といって良いだろう。それでは何故、軍令部に情報が伝達されなかったのであろうか。

当時、北東方面艦隊参謀兼第十二航空艦隊参謀第五艦隊参謀北方軍参謀であった藤田菊一大佐の日記二五日項には

「本日中同隊〔小澤の機動部隊〕よりは何等戦斗に関する電報を見ず。唯、早朝敵機の触接を受けたること[17]と後刻旗艦を大淀に変更せることを報じたるのみ[18]」

と記されており、四空母が沈没した二五日、少なくとも藤田が日記を記した時刻までには「早朝敵機の触接を受けたることと旗艦を大淀に変更」したこと以外に「戦斗に関する電報」が無かったものとみられる。少なくとも「旗艦を大淀に変更」したことを告げる電報以前に被害に関する電報が見られなかったことは、この当時、戦艦大和乗組みの暗号士であった小島清文が二五日の状況として戦後に記した「それまで全く消息不明だった小沢艦隊から一通の電報が飛び込んで来た。十二時過ぎである。「旗艦を大淀に移譲、なお交戦中[19]」」という一文から傍証できる。

つまり、空母が沈没した二五日、少なくとも藤田が日記を記した時刻までに、小澤の機動部隊が発電したのは、「旗艦を大淀に移譲、なお交戦中」という趣旨の電報だけで、空母四隻の沈没を告げるものは無かったわけである。

しかしながらこの一方で、当時聯合艦隊司令長官であった豊田副武の日記、「豊田副武海軍大将日誌」の一〇月二五日項には「KdMB空母全滅（瑞鶴、瑞鳳、千代田、千歳[20]）」と記入されている。尚、後述するように当時豊田は日吉にあった聯合艦隊司令部に勤務していた。

尤も、日記というものは、その当日書いたものであるのか後日纏めて書いたものであるのか判断することは極めて困難である為、他の史料からも日吉の聯合艦隊司令部に空母四隻沈没の情報が入った日時について探ってみたい。そこで当時臨時聯合艦隊司令部付であった市来

崎秀丸が書き残した「大東亜戦争中の日記抜粋及び解説」から二六日の日記を参照したい。

「一ＹＢ〔遊撃部隊〕は帰途再び空襲による被害を受けたが一応危地を脱出する。暫らく動静不明であった一ＫＤＦ〔機動艦隊〕は矢張り米ＫｄＢ〔機動部隊〕の空襲により空母四隻その他を失う。結局水上作戦は惨澹たる失敗に終った形だ。敵ＫｄＢは果して何群存在するのか、台湾沖航空戦の戦果に鑑みまことに不可解だ。[21]」

レイテ沖海戦に参加した日本の機動部隊は小澤治三郎率いる部隊しか存在しない為、ここで述べられている「暫らく動静不明であった一ＫＤＦ」が小澤部隊を指していることは確実である。つまり、台湾沖航空戦の戦果には疑問があることを知らされていない市来崎ではあったが、四空母沈没の報は二六日には得ていたことが分かる。それでは市来崎はどこから情報を得たのであろうか。これを検討するために、当時、市来崎がいた場所を探ってみたい。日記の一〇月二〇日項には「豊田長官一行二十日振りに台湾から帰還、通信施設の完備せぬ場所で指揮することは不可なることをつくづく悟られた様子だ。」という記述がある。この記述から、市来崎が聯合艦隊司令長官豊田副武と会った、あるいは、少なくとも豊田の話を聞いたということが分かる。奏上書に「聯合艦隊司令長官は本日〔二〇日〕第一作戦指令所に帰着[22]」とあり、豊田の回想によれば「台湾における航空艦隊の司令部では通信諜報〔諜報〕機関が不十分で、敵側はもちろん、味方の方のことについても、よくは作戦全般の状況が分らな[23]」かったとあるので、二〇日に豊田が帰った場所は日吉であり、内容も市来崎が日記に記したものと一致している。従って、市来崎は二〇日に豊田の話を日吉で聞いているとみられるので、市来崎が二六日当時いた場所も日吉の聯合艦隊司令部であったと推定出来る。このことから、「暫らく動静不明であった一ＫＤＦ〔機動艦隊〕は矢張り米ＫｄＢ〔機動部隊〕の空襲により空母四隻その他を失う。」という情報は日吉の聯合艦隊司令部で得たものと考えられる。

以上のことから二五日、遅くとも二六日には日吉の聯合艦隊司令部のもとに四空母沈没の情報が伝達され、豊田まで上げられていることは確実であろう。一方、先に述べた様に、軍令部に四空母沈没の報が入ったのは二七日の正午以降であることから、聯合艦隊司令部は一日以上に渡り情報を軍令部に伝達しなかったといえる。

④小括

レイテ沖海戦においても、艦艇の被害情報は迅速かつ相当程度正確に軍令部に上達されていた。しかしながら、四空母沈没に関してのみ、聯合艦隊総司令部は一日以上に渡り軍令部に上達しなかったのである。

（3）両海戦の比較

ミッドウェー海戦においては、軍令部は被害を受けた全艦に関する情報を適宜得ていた。一方、レイテ沖海戦においては、艦艇に関する沈没、航行不能、落伍については、小澤部隊所属の艦船も含めてその多くが、当日、あるいは翌日には軍令部が情報を入手しているのに対し、二五日に沈没した空母四隻に関してだけは二七日になって漸く軍令部に情報が届けられた。二五日、遅くとも二六日には日吉の聯合艦隊司令部のもとに四空母沈没の情報が伝達され、豊田聯合艦隊司令長官まで上げられていることは確実であることから、聯合艦隊司令部は一日以上に渡り四空母沈没情報を軍令部に伝達しなかったといえよう。

しかし、ここでは正確な被害情報が早い段階で軍令部に集約されていることを重視したい。

Ⅲ．陸軍の情報入手

海戦における艦艇の被害状況は、両海戦共に迅速かつ正確に現地から軍令部へと上げられていることは確認できた。但し、レイテ沖海戦における四空母沈没に関しては、聯合艦隊司令部から軍令部への連絡が遅れ、沈没二日後の二七日になり軍令部に連絡された。このことを前提として、海軍から陸軍への情報伝達、及び陸軍の情報統制について検討したい。

（1）ミッドウェー海戦

①参謀本部作戦課

まず、もっとも早い海軍からの情報伝達として参謀本部作戦課のケースが挙げられる（以下表1を適宜参照のこと）。四空母が沈没した六月六日当日、軍令部は「午後参本作戦課長〔服部卓四郎〕外部員の来部を求め戦況に関し説明を行[24]」った。作戦課長に随行した井本熊男中佐は、その日の日誌に次のように書き記した。

「六日の正午前、軍令部作戦課から参謀本部作戦課長以下作戦参謀の来部を求められ直ちに赴いた。作戦室に入ると富岡〔定俊〕作戦課長以下沈痛な面持ちで集っている。山本中佐から昨日来のミッドウェーの戦況を説明し、わが機動部隊の精鋭空母、赤城、加賀、蒼竜、飛竜の四隻全部沈没し、ベテランの搭乗員ほとんど全部を喪ったことを明らかにし、聯合艦隊は戦場を離脱し、ミッドウェー西方約一千カイリに集結中というのである。予想以上の大敗に驚愕した[25]。」

つまり、作戦課長らは軍令部に招かれた上で四空母の沈没を知らされたわけである。

②参謀本部第一部長へのミッドウェー敗戦第一報

作戦課長らが軍令部にて伝えられた情報は、六日中に参謀本部第一部長田中新一中将へ上げられた。田中の回想には「六月六日　ミッドウェー敗戦の第一報来る[26]」とある。これを受け、田中は日誌の六日項に

「1）A〔アリューシャン〕方面の拾収を如何にするや
2）M〔ミッドウェー〕方面の拾収を如何にするや
3）FS〔フィジー、サモア〕拾収
4）布哇〔ハワイ〕断念、潜水艦基地の破壊断念
拠て個々の護衛に一層力を注かしむる事[27]」

と記した。いずれもミッドウェーの敗戦を受けての事後処理を考えたものである。

③軍令部の通報

翌七日には軍令部から陸軍中枢に対して以下の通報がなされた。

「日本空母の最精鋭、赤城、加賀、蒼龍、飛龍の四隻が、アメリカ太平洋艦隊艦載機の攻撃を受け、何れも撃沈の悲運にあった。連合艦隊の母艦艦載機でミッドウェー島の米国基地を強襲し、米基地空軍と戦斗を展開したが、遂にミッドウェー基地を破壊することはできなかった。ミッドウェー基地攻撃のため離艦したわが艦載機は、

帰るべき母艦を失い、あるもの海上に漂着する。わが艦艇はこれを救助しつつあるが、一般の情勢は破局的な悲劇である。重巡最上は敵基地に向い勇敢に砲撃を行ったが、遂に大破を蒙り、速度を落して反転退却中である。[28]」

これによれば軍令部は陸軍に対し、六月七日、四空母喪失及び巡洋艦一隻大破を伝えている。巡洋艦・三隅の沈没は同七日の総員退去後の誰も見とどけていない状況下の出来事であったことからすれば、巡洋艦一隻大破という内容は妥当なものであったと考えられる。情報が揃った後の六月一二日の陸海軍両統帥部長会議では、軍令部は陸軍に対し

「損害は如何　航母四　人に24（5）00　飛も400　巡二隻攻撃。一は全然連絡なし（三隅、最上）　最上12浬に減速[29]」

と伝えている。この「航母四」について、田中は日誌の六月五日項の最後の余白に「赤城、加賀、蒼龍、飛龍 ↘〔沈没〕[30]」と大書している。この記載が六日のミッドウェー敗戦の第一報時に書かれたのか、この七日に書かれたのかは不明である。しかし、いずれにせよ、ミッドウェー敗戦後早い段階で田中に四空母沈没の報が伝えられていたことは確実である。尚、七日には残存空母についても軍令部より「正式瑞鶴　翔鶴　鳳翔　龍城〔龍驤〕特設　隼鷹　外一隻　今年中別に二隻[31]」と伝えられている。

このミッドウェー作戦では、「「ミッドウェー」島を攻略し敵機動部隊の基地を奪取する[32]」ため、陸軍兵力として一木支隊が参加していたが、六日夜半、軍令部より聯合艦隊は引き揚げるが「一木支隊は何れに回航させるか」と意見を求められ、参謀本部での検討の結果、「先つ瓦無〔グアム〕島に招致」されることで妥結した[33]。この主眼は確かに「防諜等の為[34]」であっただろうが、結果として一木支隊を後方に待機させることに成功した。この理由として海軍が陸軍に対し適切な情報伝達及び事後処理を示したことが挙げられよう。

④陸軍中枢の状況判断

一方、ミッドウェー海戦の被害報告を受けた陸軍中枢の状況判断は如何なるものであったのであろうか。田中新一の日誌を参照したい。日誌七日項には「思いもよらぬ大敗北、太平洋の覇業潰えたり」と記され、さらに杉山元参謀総長の「永野〔軍令部総長〕の二年間の保障は破れた、別に方面をかえなければならない」という言を引き、戦局の前途や軍令部の心境を思い「暗然たり」とそのときの雰囲気が書き記されている[35]。即ち、この海戦が日本側の大敗であったことを陸軍中枢は明確に理解している。

さらに軍令部は陸軍中枢に対し、六月九日に「海軍作戦が今や重大危局に陥りつつある[36]」、一一日には「残存空母二にては守勢の外ない[37]」と述べている。この「残存空母二」とは前月の珊瑚海海戦で損害を受けミッドウェー海戦に参加できなかった五航戦の瑞鶴、翔鶴という二隻の攻撃用空母をあらわすと見られる。翌一二日の陸海軍両統帥部長会議においても「航母の残りは大したものに非す[38]」と再度、陸軍中枢に対し空母四隻沈没がもたらした影響を説明している。

つまり、海軍が陸軍に対し四空母が沈没した翌七日に四空母が沈没、さらに巡洋艦二隻が大破、内一隻が後に沈没したことを伝え、それがもたらした影響までも説明していることは確実である。

⑤陸軍の情報統制

一方、情報統制に関しては、海軍[39]だけでなく、「ミッドウェーの真相は、陸軍においては参謀本部の作戦課と各部長、次長〔田辺盛武〕、総長〔杉山元〕、陸軍省は軍務局長〔佐藤賢了〕[40]、次官〔木村兵太郎〕、大臣〔東條英機〕以外には厳秘とされた[41]」とされる様に、陸軍でも行われていた。軍務課長眞田穣一郎の日記にも「発表に注意　患を無くすること　禍を転じて福とすること　防諜のこと[42]」と明記されている。例えば、前陸軍大臣で当時支那派遣軍総司令官であった畑俊六大将のもとにミッドウェー作戦の結果が齎されるのは海戦の一月以上後の七月八日のことであるが、その日の日誌には

「先般のミドウエー進攻作戦は米の主力艦隊を誘出す為実行したるものなるも、彼の主力艦は出で来らず却て我主力艦及航空母艦が空陸よりする敵航空兵力の目標となり、遂に有力なる我航空母艦二隻を失ひたるのみならず、主力艦にも若干の損傷ありたる如く[43]」

と記され、大本営発表[44]通り空母喪失は二隻と伝えられている。中国に派遣されていたとはいえ前陸相にさえ真相を伝えていないことは、海軍の敗退とはいえ陸軍側でも厳重に情報統制がなされたことを示している。これにより、多くの陸軍軍人には正確な情報が伝えられなかった。彼らはその理由を海軍が陸軍に情報を伝えなかったからだと憶測したと見られる。

⑥小括

軍令部は被害情報に関しほぼ即時に情報を入手しており、四空母が沈没した翌日の七日には参謀本部に公式に四空母沈没を伝えた。情報を受けた陸軍中枢は、「太平洋の覇業潰えたり」、「永野〔軍令部総長〕の二年間の保障は破れた」と状況を的確に認識した。さらに海軍は、空母四隻の沈没がもたらした影響についても陸軍に説明している。

他方、被害の実態に関しては、海軍のみならず陸軍においても厳に隠蔽された。そのため多くの陸軍軍人が正確な情報入手をすることが出来ず、海軍が陸軍に情報を伝えなかったという憶測が流布されたのであろう。

（2）レイテ沖海戦

①海軍からの被害情報の連絡

『戦史叢書』では、海軍の被害がどの程度陸軍に伝達されたのかについて触れられていないが、当時、参謀本部第一部長であった眞田穣一郎の日記によれば、被害に関しては相当正確かつ迅速に伝えられていた様である。「眞田穣一郎少将日記[45]」の内容は表2の通りである。確かにメモ書きしたものであるが故か、不完全な点や前後の内容に整合性が取れない点等が処々指摘出来るが、全体として見れば、ほぼ正確であり情報が伝達されるまでの時間差も小さいことがわかる。特に、聯合艦隊司令部が軍令部に伝えるのを躊躇した四空母沈没に関しても、軍令部が情報を入手したとされる二七日当日に陸軍に情報伝達がなされていることは注目に値しよう。すなわち、海軍から陸軍への情報伝達は迅速かつほぼ正確に行われていたといえる。

②海軍からの敵残存艦艇の連絡

レイテ沖海戦については、海軍から陸軍へ敵残存艦艇に関する情報提供がなされていたことがわかった。二七日には海軍から、敵残存艦艇として

「正A〔正規空母〕×3、C改〔巡洋艦改装空母〕×3程度か殆

んど無傷にて残り、aA〔特設空母〕×10程度在るへし（中略）F〔敵〕のB〔戦艦〕は×10内外未たある」[46]

と伝えられている。ここにあらわれる数字は、軍令部で検討された敵残存艦艇「敵残存兵　正A×3　CA×3　aA×10以上　B×10内外」[47]と内容的に一致していることから、敵残存艦艇に関しても、軍令部は推計した数字をほぼそのまま陸軍に伝えていることが分かる。さらに、戦果に関しても、軍令部は陸軍に対し二六日、

「撃沈　正A×1　aA×3～4　B×1
甲C〔一等巡洋艦〕×2　乙C〔二等巡洋艦〕×1　d×1
大破　正A（大）×1　C改A×1
中破　大A×2　ワスプ×1　Aらしき×1　C×1
小破　aA×3～4　B×2
計　撃沈破　21」[48]

と大本営発表と比べて相当少なめに評価した数字を通達しているのである。この数字は軍令部で戦果検討された後の数字であると考えられる。従って、二七日には大本営発表のみならず、空母四隻沈没を含むほぼ全ての艦船の被害情報、敵残存艦艇に関する情報、大本営発表よりも相当少なめに評価した戦果を知らされていたことになる。

③陸軍中枢の状況判断

①、②で述べたように、相当正確な情報を得ていた陸軍中枢のレイテ沖海戦に対する評価はいかなるものであったのか。一〇月二七日における評価は、

「総合的には結構であったと思ふ」、「もう一息だよ」[49]

というもので、敗戦という意識は全く感じられない。つまり、陸軍中枢は海軍からレイテ沖海戦に関してほぼ正確な被害報告及び敵残存艦艇に関する報告を受けていたが、レイテ沖海戦の評価と決戦の見通しを全く誤ったということが出来るだろう。

④陸軍の情報統制

戦勝気分の下、陸軍は二七日「レイテ地上決戦へ」の転換を指導、発電した。[50]現地の軍に示した判断を最も端的に示すのが、二七日二二二五に参謀本部第二課長服部卓四郎が発した電報中の一文である。

「敵機動部隊か殆んど潰滅的打撃を受けたること疑なく、目下に於ける戦勢は大局より見て我に有利にして、現況は寸毫の疑念なく全戦力を決勝点に集中すへき戦機なりと考へあり」[51]

つまり、陸軍中枢は海軍から敵残存空母数に関する情報を得ていながら現地には伝えなかった。ミッドウェー海戦後と同様にレイテ沖海戦後にも陸軍中枢による情報統制がなされ、決戦を決行する方面軍にすら真相は知らされなかったのである。この結果、二七日、戦勝気分下に第十四方面軍はレイテ地上決戦に突入することになる。

⑤小括

レイテ沖海戦後、海軍は陸軍中枢に対し、大本営発表とは別に、空母四隻沈没を含むほぼ全ての艦船の被害情報、敵残存艦艇に関する情報、並びに大本営発表よりも相当少なめに評価した戦果を伝えている。しかし、陸軍中枢は、実際に決戦を行なう方面軍にさえ真相を伝えず、「敵機動部隊か殆んど潰滅的打撃を受けたること疑なく、目下に於ける戦勢は大局より見て我に有利」との状況判断を伝えた。そのため方

面軍は、二七日レイテ地上決戦が指導、発電を受け、戦勝気分下にレイテ地上決戦に突入することとなった。

（3）両海戦の比較

ミッドウェー・レイテ沖両海戦において、軍令部から陸軍への被害情報伝達は相当程度迅速且つ正確になされていた。それ故、「陸軍には海軍の情報が入らず、海軍には陸軍の情報が入らないのが実情であった」（野村実氏）などの従来の説は誤りであるといえよう。

それでは何故、「殊に陸海軍間の相互不連絡が比島決戦作戦方針の大変更、レイテ沖海戦、レイテ島決戦失敗の主要な原因となった」（有末精三）、「海軍が（中略）敵空母は全滅せりと通報して陸軍の作戦を誤まらせ、比島決戦を惨敗に終らせた」（高山信武）等の経験談が陸軍出身者を中心に広まったのであろうか。[52] この理由は、海軍のみならず陸軍でも海戦の結果は厳に秘匿されたことにあると考えられる。陸軍の情報統制により情報を得られなかった陸軍軍人は、自身の所属する陸軍ではなく、海軍が海戦の真相を隠蔽したのだと誤解したのであろう。

一方、ミッドウェー海戦後には、「永野の二年間の保障は破れた」と述べた杉山総長に代表される様に、陸軍中枢は敗戦の意味を適切に把握しているのに対し、レイテ沖海戦後には海軍から情報が入っているにも関わらず、「総合的には結構であったと思ふ」、「もう一息だよ」という様に陸軍中枢には敗戦という意識を見ることは出来ない。このことが影響してか両海戦後の陸軍の対応は全く異なっている。すなわち、ミッドウェー海戦後には一木支隊のグアム退避を妥結したのに対し、レイテ沖海戦後には大本営発表だけでなく、空母四隻沈没を含むほぼ全ての艦船の被害情報、敵残存艦艇に関する情報、及び大本営発表よりも相当少なめに評価した戦果を伝えられた一〇月二七日、陸軍中枢は海軍からの情報を現地に伝えず、逆に「目下に於ける戦勢は大局より見て我に有利」とし、レイテ地上決戦を指導、発電してしまったのである。

Ⅳ．おわりに

海軍の被害情報の陸軍への伝達について調べた結果、通説とは異なり、ほぼ完全な情報伝達がなされていたことが分かった。つまり「陸軍には海軍の情報が入らず、海軍には陸軍の情報が入らないのが実情であった」とする野村氏の説は明確に否定される。さらに台湾沖航空戦においては敵残存空母数が、レイテ沖海戦においては、上記の被害情報や大本営発表のみならず、大本営発表よりも相当抑えた戦果、敵残存艦艇に関する情報をも合わせて伝達されていた。陸軍が作戦を誤った理由は海軍からの情報伝達の不備には求められず、陸海軍間の連絡が不充分なものであったため陸軍が作戦を誤ったという陸軍出身者の経験談も明確に否定される。

それでは何故、海軍が正確な被害情報を陸軍に伝達しなかったと陸軍の中堅将校らは考えたのか。これについても、陸軍上層部は海軍からの情報をも強力に統制し、陸軍軍人に正確な情報提供を行わなかったことが判明した。つまり、陸軍軍人が正確な情報を得られなかった理由は、実際には陸軍上層部による情報統制によるものであったが、これを海軍による情報統制の結果だと考えたのである。

以上をまとめると、陸軍は海軍から正確な被害情報を伝達されてい

表 3　陸海軍主要官職変遷表

			昭和17年 6 月	昭和19年 6 月	昭和19年10月
			ミッドウェー海戦	マリアナ沖海戦	レイテ沖海戦
内閣		総理大臣	東條　英機	東條　英機	小磯　國昭
内閣		外務大臣	東郷　茂徳	重光　　葵	重光　　葵
陸軍部	陸軍省	陸軍大臣	東條　英機	東條　英機	杉山　　元
陸軍部	陸軍省	陸軍次官	木村兵太郎	富永　恭次	柴山兼四郎
陸軍部	陸軍省	軍務局長	佐藤　賢了	佐藤　賢了	佐藤　賢了
陸軍部	陸軍省	軍務課長	眞田穣一郎	二宮　義晴	赤松　貞雄
陸軍部	参謀本部	参謀総長	杉山　　元	東條　英機	梅津美治郎
陸軍部	参謀本部	参謀次長	田辺　盛武	秦　彦三郎	秦　彦三郎
陸軍部	参謀本部	参謀次長		後宮　　淳	
陸軍部	参謀本部	第一部（作戦）長	田中　新一	眞田穣一郎	眞田穣一郎
陸軍部	参謀本部	第二課（作戦）長	服部卓四郎	服部卓四郎	服部卓四郎
陸軍部	参謀本部	第二課作戦班長	辻　　政信	杉田　一次	杉田　一次
海軍部	海軍省	海軍大臣	嶋田繁太郎	嶋田繁太郎	米内　光政
海軍部	海軍省	海軍次官	沢本　頼雄	沢本　頼雄	井上　成美
海軍部	海軍省	軍務局長	岡　　敬純	岡　　敬純	多田　武雄
海軍部	海軍省	第一課長	高田　利種	山本　善雄	山本　善雄
海軍部	軍令部	軍令部総長	永野　修身	嶋田繁太郎	及川古志郎
海軍部	軍令部	軍令部次長	伊藤　整一	伊藤　整一	伊藤　整一
海軍部	軍令部	第一部（作戦）長	福留　　繁	中澤　　佑	中澤　　佑
海軍部	軍令部	第一課長	富岡　定俊	山本　親雄	山本　親雄
海軍部	聯合艦隊司令長官		山本五十六	豊田　副武	豊田　副武

＊執筆者作成

たが、これを作戦指導に充分に活かすことは無かった。その一方、陸軍上層部はこうした情報を支配下の軍人たちに提供しなかったため、陸軍軍人の間で海軍が陸軍に情報を伝えなかったという見方が広まり、誤った通説が流布されて来たのである。

註

（1）野村実「太平洋戦争下の『軍部独裁』」（三宅正樹『第二次大戦と軍部独裁』（第一法規出版、一九八三年、二一頁））

（2）戸部良一『逆説の軍隊』（中央公論新社、一九九八年、三一一～三一二頁）

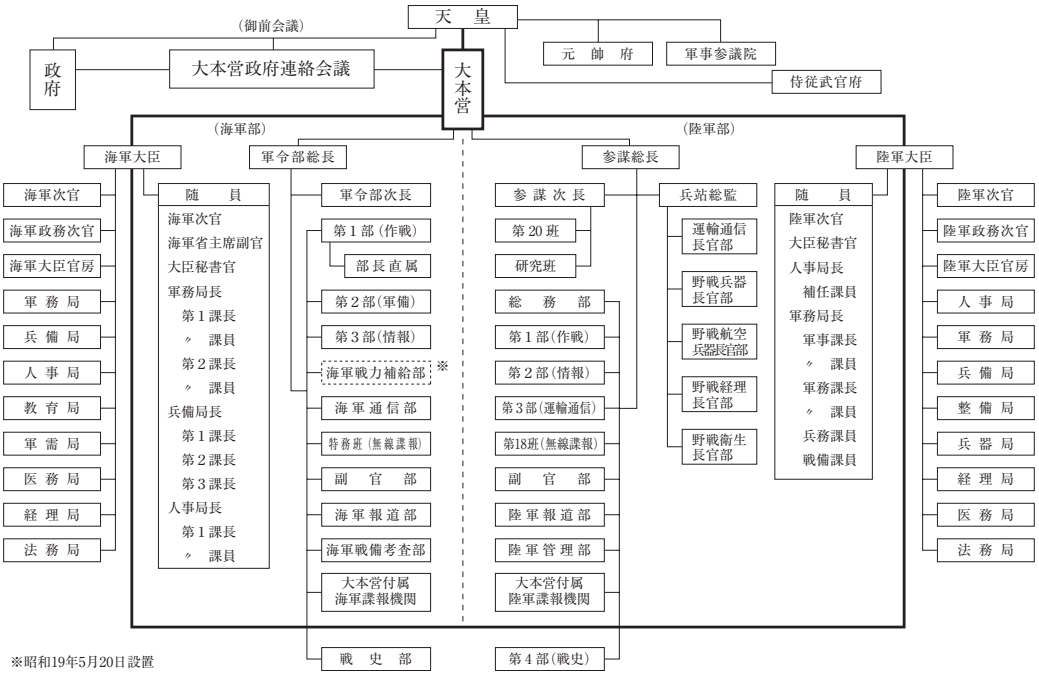
（3）有末精三『政治と軍事と人事』（芙蓉書房、一九八二年、三一五頁）

（4）高山信武『参謀本部作戦課』（芙蓉書房、一九七八年、二一七頁）

（5）井上成美「海軍航空戦備の現状」昭和一六年七月一七日（井上成美伝記刊行会『井上成美』（井上成美伝記刊行会、一九八二年、資―135）所収）

井上は戦後にも「過去を顧るに、海軍が陸軍に追随せし時の政策は、ことごとく失敗なり。二・二六事件を起こす陸軍と仲よくするは、強盗と手を握るが如し。」と述べている（新名丈夫『海軍戦争検討会議記録』（毎日新聞社、一九七六年、八〇頁））。

大本営組織図（昭和16年12月開戦時）



※昭和19年5月20日設置

出典：軍事史学会『大本営陸軍部戦争指導班機密戦争日誌』下（錦織社、一九九八年、七七〇頁）

（6）高松宮宣仁親王『高松宮日記』第四巻（中央公論社、一九九六年）但し、六日付となっているものの、内容が時系列順に並べられているわけではなく、七日や八日の記述が見られる。ミッドウェー海戦に関する情報が高松宮に入る度に逐一書き足していった、あるいは八日以降にミッドウェー海戦に関する記録を纏めて記入したものと考えられる。

（7）金岡知二郎「金岡知二郎海軍少将日記抄」（防衛研究所所蔵①―日誌回想―141）昭和一七年六月六日項には「四隻共沈みたるものゝ如し」と記されている。

（8）中澤佑「中沢軍令部第一部長ノート　戦況第六」（防衛研究所所蔵　①―日誌回想―378）

（9）木戸幸一「日記に関する覚書」（木戸日記研究会『木戸幸一関係文書』（東京大学出版会、一九六六年、一二八頁）所収）

（10）「昭和十九年十月二十三日　戦況に関し　奏上」、「昭和十九年十月二十四日　戦況に関し御説明資料」、「昭和十九年十月二十五日　戦況に関し　奏上」、「昭和十九年十月二十六日　戦況に関し奏上」、「昭和十九年十月二十七日　戦況に関し御説明資料」、「昭和十九年十月二十八日　戦況に関し　奏上」（「奏上書　1／7（昭和十九年十月）」（防衛研究所所蔵　①―奏上―1）所収）

（11）上奏が行われた時刻に関しては「及川史料統合」（『及川古志郎大将メモ（2冊）附及川史料統合』（防衛研究所所蔵　①―日誌回想―880）所収）を参照した。尚、月はいずれも一〇月。

（12）山田朗『昭和天皇の軍事思想と戦略』（校倉書房、二〇〇二年、三〇三頁）

（13）前掲『昭和天皇の軍事思想と戦略』（三〇三頁）

(14) 元日向艦長海軍少将野村留吉「比島沖海戦中の日誌」（防衛研究所所蔵　①—日誌回想—813）

(15) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　大本営海軍部・聯合艦隊〈6〉』（朝雲新聞社、一九七一年、五二五、五三一頁）　防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　大本営海軍部・聯合艦隊〈7〉』（朝雲新聞社、一九七六年、二八頁）

(16) 前掲「比島沖海戦中の日誌」

(17) 「機密第二五〇七三二番電」（前掲『戦史叢書　大本営海軍部・聯合艦隊〈6〉』（五二四頁）所収）には「機動部隊本隊敵艦上機の接触を受けつつあり」とある。

(18) 藤田菊一「藤田菊一日誌」第八巻（防衛研究所所蔵　①—日誌回想—496）昭和一九年一〇月二五日

(19) 小島清文「栗田艦隊反転は退却だった」（『文藝春秋』一九七八年三月号、三五九頁）

(20) 豊田副武「豊田副武海軍大将日誌」（防衛研究所所蔵　①—日誌回想—818）昭和一九年一〇月二五日

(21) 市来崎秀丸「大東亜戦争中の日記抜粋及び解説」昭和一九年一〇月二六日項

(22) 「昭和十九年十月二十日　戦況に関し　奏上」（前掲「奏上書1／7（昭和十九年十月）」所収）

(23) 前掲『最後の帝国海軍』（一三九頁）

(24) 「軍令部作戦日誌（佐薙日記抜粋）」（防衛研究所所蔵　①—日誌回想—211）昭和一七年六月六日

(25) 井本熊男『大東亜戦争作戦日誌』（芙蓉書房出版、一九九八年、一四一頁）

(26) 田中新一「田中新一中将回想録　その二」（防衛研究所所蔵文庫—依託—24）　田中新一「大東亜戦争作戦記録　其六」（防衛研究所所蔵　文庫—依託—269）

(27) 田中新一「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の四」（防衛研究所所蔵　中央—作戦指導日記—28）昭和一七年六月六日

(28) 前掲「大東亜戦争作戦記録　其六」

(29) 田中新一「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の五」（防衛研究所所蔵　中央—作戦指導日記—29）昭和一七年六月一二日項

(30) 前掲「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の四」昭和一七年六月五日

(31) 前掲「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の四」昭和一七年六月七日

(32) 大本営陸軍部「一木支隊作戦要領」昭和一七年五月五日（前掲『戦史叢書　大本営陸軍部〈4〉』（三五～三六頁）所収）

(33) 井本熊男「井本日誌」昭和一七年六月六、七日（前掲『戦史叢書　大本営陸軍部〈4〉』（二三一、二三二頁）所収）、前掲『大東亜戦争作戦日誌』（一四一頁）

(34) 前掲「井本日誌」昭和一七年六月七日（『戦史叢書　大本営陸軍部〈4〉』（二三二頁）所収）

(35) 前掲「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の四」昭和一七年六月七日

(36) 前掲「田中新一中将回想録　その二」昭和一七年六月九日

(37) 前掲「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の五」

昭和一七年六月一一日

(38) 前掲「参謀本部第一部長田中新一中将業務日誌　七分冊の五」

(39) 海軍の情報秘匿については、例えば前掲『戦史叢書　ミッドウェー海戦』（六〇二～六〇三頁）を参照のこと。

(40) 佐藤賢了は、ミッドウェー海戦直後（佐藤は六月五日に四空母沈没を知らされたと回想しているが、四空母全てが沈没したのは六日であるため、この様に記載した。）、田辺参謀次長から「精鋭の航空母艦四隻やられてしまった」と伝えられた上、「士気に関係するから、このことはだれにもいってくれるな」と口止めされたと回想している（佐藤賢了『大東亜戦争回顧録』（徳間書店、一九六六年、二四二頁））。

(41) 前掲『大東亜戦争作戦日誌』（一四二頁）

(42) 眞田穣一郎「眞田穣一郎少将日記」（防衛研究所所蔵　中央―作戦指導日記―50）尚、戦果に関しても「海軍の戦果　米が未た本当に何隻たったかを言ってゐない　新聞で発表の通りとすること」としている。

(43) 畑俊六「畑俊六元帥日誌　第六巻」（防衛研究所所蔵　中央―作戦指導日記―409）昭和一七年七月八日

(44) 大本営発表にて、沈没を秘匿するか否かの基準は、前掲『戦史叢書　ミッドウェー海戦』（六〇二頁）では「「蒼龍、加賀」は当日沈没したが、「赤城、飛龍」は敵が沈没を確認していないと思われたためか」と推定している。史料調査の結果、「機密保持に関する件」（（第一航空隊飛行長松本眞実中佐「松本資料　その2」（防衛研究所所蔵　①―日誌回想―513）所収））と題される史料が見つかり、「二、右〔大本営発表と同じ〕以外の被害（敵と隔離せる後行動不能となりたるもの等）に関しては作戦上支障なしと認めらる迄一切公表せず」とあることから、『戦史叢書』の推定通り敵から離れる以前に沈没したか否かであったことを確認できた。

(45) 眞田穣一郎「眞田穣一郎少将日記」（防衛研究所所蔵　中央―作戦指導日記―80）

(46) 前掲「眞田穣一郎少将日記」昭和一九年一〇月二六日

(47) 中澤佑「中沢軍令部第一部長ノート　作戦参考第六」（防衛研究所所蔵　①―日誌回想―389）一〇月二六日定例会報

(48) 前掲「眞田穣一郎少将日記」昭和一九年一〇月二六日

(49) 前掲「眞田穣一郎少将日記」昭和一九年一〇月二七日

(50) 前掲『戦史叢書　捷号陸軍作戦〈1〉』（三〇四頁）

(51) 「参電第五一六号」昭和一九年一〇月二七日二二五発（「昭和十九年　参謀本部発電綴　巻二」（防衛研究所所蔵　中央―作戦指導重要電報―11）所収）

(52) 富永恭次は「海軍はうそ八百を云う」とまで述べている（富永恭次「第四方面軍司令官口述書　比島航空作戦の回答」（防衛研究所所蔵　陸空―日誌回想―1067））。